

区民会議・子ども部会（第1回）・摘録

日時 平成18年10月2日（月） 午前10時～12時半

場所 宮前区役所第4会議室

出席者 委員：目代委員（部会長）、川西委員、末澤委員、福本委員、松本委員

関係者：向丘保育園 茂木園長、保健福祉サービス課松島職員

事務局：企画調整担当主幹、同主査、こども総合支援担当参事、同主幹、保健福祉サービス課長

開会

議事

川崎市・宮前区におけるこどもの現状と課題について

- ・資料1～5に沿って説明があった。（別紙資料参照） 説明：事務局 中山企画調整担当主査

区の子育て現場での取り組みについて

- ・公立保育所における支援状況について、園庭開放の実情を中心に説明があった。資料7（別紙資料参照） 説明：向丘保育園 茂木園長
- ・乳幼児健康診査を通しての子育て支援の取り組みや実情について説明があった。資料6（別紙資料参照） 説明：保健福祉サービス課松島職員

課題解決に向けた取り組みについて（説明に対する質疑・意見交換）

福本委員 公的保育施設の話が出たが、区内の事業所等が持つ民間の保育施設はどのくらいあるのだろうか？ ヤクルトさんはやっているという話を聞いた。企業が自ら支出して運営する保育施設を行政が支援していくことも考えられるのではないか？

事務局 行政として把握はしていない。ただ、宮前区内にはそれほど大きな事業所が無いのであまり数は多くないだろう。

松本委員 「居場所づくり」では、衛生・安全・安心・開放感が重要なポイントだ。

末澤委員 保育士や保健師などのプロからのちょっとしたアドバイスやうなずきは、些細なことでも母親にとっては非常に意味の大きなものになる。しかし、相談時間以外に聞いていいのか、遠慮していることも多い。もっと気楽に聞いて良いことが宣伝されてよい。

カンファレンスや園庭開放に出て来られない人に対してどうするかも考えたい。

川西委員 資料6で乳幼児健診で小児科医から「健康管理上注意すべきもの」の判定を受ける子どもが20%との数字があるが、どのような内容なのか？ 病理的でない「注意すべき」と判定された世帯は子どもの育成段階で入れ替わりはあるのか？ 固定的なのか？ 育児環境からの影響などとも関係があるのか？

松島職員 例えば、6ヶ月検診での湿疹など年齢特有のものなどがある。1歳半検診では、歩行確認を行っており、まだだと要観察になる。先天的な障害などは継続的にあがっている。検診に来られなかった家庭や、育児環境等の問題が考えられる場合は、地区保健士によるフォローを行っており、次の支援への道筋をつける。具体的には電話や家庭訪問などに繋げている。

目代部会長 園庭解放の際、室内開放はどの程度行われているのか？

茂木園長 現在は4園で実施しているが、施設が狭かったり、11時半になったら空けてもらうなど条件つき。室内開放があれば、雨天でも居場所に集まることができる。

目代部会長 支援＝サロンではなく、アドバイスなど子育て中の母親に直接声をかけることも重要な支援だ。鬱の親も増えているという話も聞く。

松島職員 1歳半検診の際には家庭環境もチェックするようにしており、必要に応じて地区保健士が支援している。

目代部会長 準備委員会では「居場所づくり」に関する声が多かった。これまでの意見を聞いていると、子どもの教育というより、「親の教育」が重要であるという声が多い。

松本委員 雨天の時の居場所が求められている。地域で子供が遊んでいると「うるさい」と文句を言われる。マンションで、子どもが歩いているだけで苦情を言われたり、こども文化センターでさえ、苦情を言われたことがあった。ストレスを溜め、ノイローゼになる母親も見てきた。

宮前区は施設のある場所が偏っている。地形的に起伏が激しく、施設に通うのが困難な地区もある。公立保育園はどのこの地区でも身近にある施設だ。

「居場所づくり」はお膳立てしすぎて、当事者の参加・協力する意識が希薄になってしまっても困る。自分達で立上げ、引き継がれてきた市民活動も担い手不足で継続が難しくなっている。フリーペーパーにも慣れてしまっている。

末澤委員 当事者意識に欠け、自分が汗をかくことを嫌い、支援だけは当然のように受けて胡坐をかいている親がいる。一方担い手側は固定化する傾向があり、入りにくい雰囲気も生まれている。その意味でも「母親育て」が重要だ。

川西委員 誰しもが楽はしたいもの。区民会議は公的資金を使っているわけだから、ここで打ち出す施策はどこまでの範囲にするか子育ての困難さによる範囲指定が必要だ。福祉先進国であるノルウェーでは、日本では経団連にあたる労働側の団体が児童福祉に関わっており、保育施設の待機児童がゼロになるなど、労働・家庭・教育現場の様々な生活の場面の法的な制度整備がリンクして子育て支援がなされている。5人の子どもを持ちながらキャリアアップしている母親もいる。

先程母親の意識がお客様意識であるとの問題が指摘されたが、一番必要とされているところからの支援はなにか、分けた議論が必要だ。

末澤委員 担い手側と受け手側が別れてしまっていることが問題だ。今、担い手側は自分たちの活動がいつまで続けられるか不安を抱えている。長く担い手側にいると自分たちの活動を客観的に見ることができない。

松本委員 活動を一度辞める話が出ている団体も多い。必要ならば、活動を求める声が再び出てきてまたつくれば良い。しかし現状で活動を辞めるのが難しい状況も抱えている。

目代部会長 今の親は叩かれ慣れていない傾向があるようだ。注意されることに非常に敏感だ。

オムツの宣伝を見て、赤ちゃんのおしっこが水色だと思って悩んでいた母親もいた。些細な悩みにも手を差し伸べるちょっとした情報交換や相談の場を現場は求めている。

福本委員 これまでの話を総合するとまず「親育て」が必要だ。今の親はあまりに神経質だ。昔はもっと子どもを放っていたし、放っておいても子どもが地域で勝手に育っていった。自分の自由ややりたいことを優先しすぎる親もいる。長期的な施策が必要だ。

「居場所づくり」については、ある程度結論や方向性がすぐ打ち出せるのではないかな。

松本委員 昔とちがって、今は子どもを放っておける場所がない。昔は地域の中でお兄さんやお姉さんと一緒に遊んでおり、その中で子どもも色々学んでいたが、今はみんな習い事などで、地域にいない。親がどこに行くにもついていかなくてはならない。交通量も多く、ちょっとした物陰にも誰がいるかわからない時代だ。

子育て支援はどうしても年齢で区切られる傾向があり、少し外れると利用できなかったり、登録できないことも多い。

目代部会長 夏休みでさえ、地域の中で子どもの姿が見えない時代だ。どのような支援をしていくのか、ハード、ソフトの両面で掘り下げていく必要がある。キーポイントはこれまで皆さんが言われているとおり、「居場所づくり」と「親育て」になるだろう。

川西委員 母親がイライラするのはなぜか？ それを緩和するには何が必要なのか？ 原因分析して方向性と実施可能な施策を打ち出そう。プロによるちょっとした助言の機会を増やすことはすぐにでもできる施策ではないか。

一人で育てなければならぬ不安感の解消には、夫からの癒し、協力も重要だ。父親の意識改革にも必要。やりたくてもできない父親が多いなら、企業との連携なども考えてはどうか。

例えば、子どもを連れて参加できるネイルアートの講習会など遊び要素が入ってもいいから、母親同士が集まってリラックスできる場の提供も必要だ。

目代部会長 次回はキーワードを出しながら、施策・方向性を、みなさんの賛同の中で打ち出していききたい。

閉会